公募研究　A033（課題番号：07205204）

北部琉球（奄美諸島）の歴史的・民俗的文物の情報化

研究代表者：田畑千秋・大分大学・教育学部・教授

１．研究項目：A03　琉球・沖縄の歴史的文物の情報化

２．研究課題名：北部琉球（奄美諸島）の歴史的・民俗的文物の情報化（課題番号：07205204）

３．研究期間：平成７年度（1995）

４．交付研究費：平成７年度　　1,800 千円

５．研究組織（氏名：所属機関・部局・職）
（研究代表者）田畑　千秋：大分大学・教育学部・教授
（研究分担者）小川　直之：国学院大学・文学部・講師

６．研究目的
(１)研究の背景
研究代表者（田畑）は、これまで奄美諸島が琉球・沖縄と歴史的、文化的にどのような関係にあったかということを研究のテーマとしてきた。そしてその成果は「琉球諸島の奄美大島」「ドイツ人のみた明治の奄美」「静嘉堂本『定西法師琉玖談』翻刻と校注」等々の論文で発表してきた。本研究はそれらを発展的に継承するものである。
(２)研究目的
平成７年から、奄美諸島における、琉球・沖縄時代の歴史的、民俗的文物の情報化を実践する。あわせて歴史的、民俗的史資料の発掘を推進し、学界に貢献する。
(３)特色と意義
奄美諸島における歴史的、民俗的文物の情報化は、まだ未着手の分野で、この研究が完成することによって、奄美における琉球関係の史資料は一般公開が可能になる。
(４)国内外の研究との関連
国際日本文化研究センターの共同研究「日本文化の深層と沖縄」、またボン大学日本学研究所の琉球研究等々と連携を通じて、国際的日本研究（日本学）の発展に寄与する。

７．研究経過
奄美諸島の中心である奄美大島の琉球関係史資料の悉皆調査を行ない、それをパーソナルコン

ピュータに入力、情報の一般公開をめざした。また、それによって分析的研究をも推しすすめ、奄美大島の琉球時代における歴史的、地理的役割を考察した。研究代表者（田畑）は精神文化に関する研究を行ない、分担者（小川）は、物質的文物の調査、収集、情報化にあたった。

８．研究成果の概要

研究代表者と分担者は、これまで奄美諸島が琉球・沖縄と歴史的・文化的にどのような関係にあったかということを研究テーマとしてきたが、本研究によってそれを発展的に継承することができた。奄美大島における琉球・沖縄時代の歴史的・民俗的文物の情報を資史料として発掘することができた。具体的に言うと、奄美大島における琉球方言資料として、奄美の伝承ことわざを数百項目採集することができ、その一部を専門誌に発表した（『国文学解釈と鑑賞』96 年１月号所載)。例として次のようである。

奄美のたとえ言葉 ── 名音集落の語彙より ──

はじめに

語の本来の意味がどのように変化して日常使われているかを、奄美大島名音集落のたとえ言葉にみてみたい。名音集落は奄美大島大和村の西南部に位置する集落である。水田はほとんどなく、かつては山深く入り込み、焼畑を主とした農耕を行なっていた。戦前までは薩摩芋を主食とし、端境期には蘇鉄の幹からのデンプン採取法、マナツというシダ植物の根の採取法等を今に伝えている集落である（他にもグーリと呼ばれるウリ科の植物からのデンプン採取法等を伝えている)。ここでは戦後の食料難時には、ヘゴ（高木シダ）の頂部の葉柄根の固い部分を削りとり、中の軟質部をも食していたという。また、集落の前面の海はサンゴ礁の干瀬が広がり、魚、貝等の天然の恵を与えてくれていた。集落を上空から見ると、深い山に背後を囲まれ（三角形の二辺)、一方のみを海に開いた、隔絶された奄美大島の一つの典型的な集落である。

ここに紹介するたとえ言葉は、この名音集落で生まれ育った川畑豊忠翁の教示によるものである。翁は昔話を一六〇余話語るすぐれた話者であり、ことわざ的表現も五三〇余話教示して下さった。ここに紹介するたとえ言葉は、そのことわざ的表現の中の一部である。

さて、たとえ言葉は多くの場合、人々の想像力のたまものである。形状、姿態、状態、色、性質等々、さまざまな視点からその特質を抽出して、日常のいろいろな場面で効果的に使用する、一種の表現法である。使用する時は主に、「～のように（～nisi, ～nusi)」、「～だよ（～zjaga)」等と接続していくことが多い。奄美大島には、ここにあげたものでなく、まだまだ多くのたとえ言葉があることは付け加えておこう。

動物のたとえ言葉

あかひげの声（akahiginu ku'i）……美しい声のこと。あかひげは国の天然記念物で、七声変えて鳴くといわれ、聞きほれるような、なんともいえない情緒ある声である。それで声の美しい人を「あかひげの声のような人」などという。

あひるの目（ahirunu mi）……細い目を評していう。「あの人の目はあひるの目だ」などという。

蟻（ami）……身体が小さくて、それでいて力の強い人を評していう。「あの人は蟻だよ」など

という。
蟻の行列（amᵢnu recu）……ぞろぞろと列なって行く様を評していう。
いきゅんの目眉（ikjunnu mᵢmajo）……目もとや眉の美しいのの形容。いきゅんは海鳥の名。白い鳥で目鼻だちがすっきりと美しい鳥である。
矢がかり猪（jagahari sisi）……むこうみずな人、しゃにむに攻撃してくる人のこと。矢があたって負傷した猪は狂暴になり、攻撃してくるのでこういう。
犬と猫（intu ma'ja）……犬猿の仲のこと。
兎の糞まり（osagin kusu）……とほうもないところということ。国の天然記念物アマミノクロウサギは糞を川中の石の上や尾根道等、巣から離れたとほうもない所にするのでこういう。
青鳩の声（o: batunu ku'i）……前述のあかひげの声と同様、しみじみと聞きほれるような、なつかしいひびきの声の形容である。「あの人の声は青鳩の声のようだ」等という。
青鳩の巣（o: batunu sï）……簡素な粗末な家や部屋を形容していう。青鳩は簡単な巣の作り方をするのでこういう。
カラス（garasï）……くいしんぼう、こすい奴の形容に使う。
カラスの歩き（garasïnu aqki）……びっこをひくような歩き方を形容していう。
喜界馬（kikja ma）……小柄で力の強い人をいう。喜界馬はもういないが、トカラ馬や与那国馬と似た小柄な馬であった。
きつつき（kïcïkja）……親不孝な人を評して、「あの人はきつつきだよ」等という。雀ときつつきの昔話から出たたとえ。
熊の魚釣り（kumanu jukwa: si）……後のしめくくりの悪い人（事）を評していう。ちなみに奄美には熊はいない。
子引き犬（kwahiki in）……ぞろぞろとお供を引き連れて行く様子を形容していう。
ケンムンの糞（kïnmunnu kusu）……人をののしる時にいう。ケンムンは奄美妖怪の代表的なもの。存在しない故に、「物の数でもない奴が」の意になる。
猿の面（sarun c ïra）……顔の汚い者、みにくい者の形容。ちなみに猿は奄美にはいない。
猪耳（sisimimi）……うしろにそった耳、小さい耳の人を評していう。
鶏（turi）……かきちらかす人、早く寝る人を「鶏だね」等と評する。
ひゅーぬいゅ（魚名, hju:nuju）……ぺちゃんこな復を形容していう。ひゅーぬいゅはマンビキ（シーラ）のこと。ひゅーぬいゅはひらたい魚であるのでこういう。
マッタブ（蛇名, maqtabu）……あてにならない人のこと。マッタブは人をかまないので、明日は明日はといってちっとも実行しない人を評していう。
ふくろうの目（kuhunm ï）……ギョロとして大きな目の人を評していう。このふくろうは方言名でマヤシクフという。マヤは猫のことで、鳴き声が「ミャオ」と聞こえるのでこの名がある。
猫の子産み（ma'jan kwanasi）……容易なこと、簡単なこと（もの）の形容。
猫の目（ma'janum ï）……常に油断のならない目つきの形容。

植物・その他のたとえ言葉

青芭蕉葉（o:gasja）

恐怖で青ざめた顔を形容していう。また、すぐれない顔色を強調していう。「o:」は「青」で、

「gasja」は一般的には広い葉のことをいう。単独では「kasja」であるが、前に「o:」があるので、濁音になったもの。「青芭蕉葉のようにして（o:gasjanusi si）」というように使う。
胡椒種（kosjontanï）
　小さいという事を強調しているのだが、特に身体が小さいのに快活で、いたずらっ子等を評していう。「胡椒種がいたずらばかりして（kosjontanïmunnu gamakaribëriai）」等という。また、小さい人のことを評して、「胡椒の木にはしごを掛けて上る奴が（kosjogin hanaci hwasi kë:tï nuburjun munnu）」等ともいう。
らっきょう面（gaqkjozïra）
　あつかましい人のこと。むいてもむいても皮が出てくるので、「面の皮の厚さは、らっきょうのようだ（cïra konu acusa'ja gaqkjonusi si）」ともいう。また、「らっきょう面者（gaqkjozïranun）」ともいう。
ひっかぶり者（hiqkjaburimun）
　おくびょう者のこと。大小便をもらすことを、「ひっきゃぶる（hiqkjaburjun）」というのでこういう。

　また、奄美大島における近世の採集食糧の調査研究を行ない、その資料を収集し、その一部を専門誌に発表する予定である。（『奄美の民具』第4号、96年4月刊）。例として次のようなものである。
　山野の果実
　今回は奄美の民具と直接には関係しないが、かつての奄美の村落社会において、常に身近な存在であった山野の果実を紹介しよう。かつての村落社会は食糧が豊富であったなどとはけっしていえないが、それでも山野には季節季節の木の実がなり、特に子供達にとってはそれが何よりの楽しみになっていた。子供達は親が山畑の仕事の帰りに持ってきてくれるこれら木の実の土産を心待ちにしていたことを思い出す。イチュビ、アマシバ、ナデツィ等々は高等科に入るくらいの年になると、ハブに気をつけながらも子供達だけで採りにもいった。そして、ここに記録するすべては奄美大島の東南部に位置する大和村名音集落の川畑豊忠翁の御教示によるものである。そのことをまず記して謝意を表する。なお、植物名とあるのは果実をつける植物の方言名、果実名も方言での呼称である。また熟季は旧暦の月で示し、季節は豊忠翁の季節観の一端を残すため聞きとりのままを記した。和名は植物名の日本での主な呼称を記したものである。
　　ゲェマ　山地に自生する潅木の実で、直径五ミリ程。熟すると濃い紺色になり、少し甘みがある。植物名ゲェマゲィ。果実名ゲェマ。熟季秋、旧暦九月、十月頃。和名ぎま、つつじ科。ナススビ　山地に自生する潅木の実で、直径四ミリ程、熟すると濃い紺色になり、少し甘みがある。
　　タケィブ　山地の肥沃な焼畑に自生する草の実で、直径十ミリ程。熟すると濃い紺色になり、甘ずっぱい味がする。植物名タケィブ。熟季秋、旧暦八月、九月頃。
　　アマシバ　山野に自生する潅木の葉。葉を噛むと甘ずっぱい味がする。シバは葉の意。植物名アマシバ。熟季年中（常緑潅木の葉である）。和名あましば、はいのき科。
　　マヰチュビ　真いちごの意。山野に自生する草本性の植物の実。十ミリ程で甘い。植物名イチュビギ。果実名マヰチュビ。熟季四月、五月頃（山畑の薩摩芋の植え付けの頃）。和名ほうろ

くいちご、バラ科。

ニギヰチュビ　棘いちごの意。野や畑に自生し、実は赤色。甘い。熟季春から初夏。和名りゅうきゅうばらいちご、ばら科きいちご属。

キーチュビ　黄いちごの意。谷間の川辺に多く自生し、実は黄色で甘い。熟季春から初夏（奥地の谷間では秋の頃に熟れる。屋根をふく平木運びの作業で食べたことがある）和名りゅうきゅういちご、ばら科きいちご属。

ノヰチュビ　野いちごの意。蘇鉄畑や野原に自生する草の実。実はマッチ棒の頭くらいの大きさで、二個から三個かたまってつく。熟れると薄紅色になり、少し甘い。

マヰチュビ、キーチュビ、ノヰチュビ等、いちごの実を食べにやってくる小鳥をねらってハブがひそんでいるので、親は子にイチュビ採りをいましめた。

アクチ　アクチギの実。熟れないうちの実をアクチといい、御飯といっしょに炊きこみ、補助食とする。熟れた実はシシアクチ（次項参照）と呼ぶ。まだ熟さない旧暦七月頃に穫り、もみ洗いして肺芽をつまみ出して、米少々を加え、粥にして食する。植物名アクチギ。果実名アクチ。採取季（未熟の頃）、旧暦七月頃。和名もくたちばな、やぶこうじ科。

シシアクチ　名音集落ではアクチギの熟して黒ずんだ紫色になった実をシシアクチ、まだ熟れない時期の実をアクチといい区別している（図鑑などではアクチとシシアクチを異なる植物としているが、名音集落では同じ実の時期の違いである）。前項で述べたように熟れないアクチは御飯と一緒に炊いて食卓にのるが、それが熟してシシアクチとよばれるようになると子供達のおやつとして楽しみな木の実となる。大豆程の大きさで黒ずんだ紫色に熟すると皮がやわらかくなり甘くなる。それをしゃぶるようにして液汁だけを飲む。植物名アクチギ。果実名シシアクチ。熟季旧暦十一月、十二月頃。和名もくたちばな、やぶこうじ科。

カネブ　山野に自生している山ぶどう。実は大豆より少し多きめ。熟れると濃い紫色になり甘い。植物名カネブカズィラ。果実名カネブ。熟季秋。和名りゅうきゅうかねぶ、ぶどう科。

バシャンムィ　糸芭蕉の実。黄色に熟れてから食べるが、黒い直径二ミリ程の種子が多く、食べにくい。しぼるようにして食べると、なんとなくしぶみがある。植物名シマバシャ。果実名バシャンムィ。熟季年中。和名ばしょう。

ナデツィ　桑の実のこと。山野に自生した桑の実が熟れると子供達は木に登ってそれを食べた。また、登校途中にナデツィを食べて先生にしかられるほど、子供達にとっては大切なおやつであった。植物名クヮーゲィ。果実名ナデツィ。熟季旧暦四月、五月頃。

その他、奄美の祭祀習俗の調査研究を行ない、琉球王朝時代のノロ祭祀の残存状況を把握した。文献資料も踏査し、奄美における近世文書の所在を把握した。そして物質文化をして、民具等も調査し、それを沖縄と比較することができた。

総括班と協力し、奄美地元の研究者達と共同研究を行ない、有形、無形の研究蓄積を共有することができた。